

# 最終報告書レポート（短期）

タイトル. インドネシアにおけるシェイクスピア作品の調査研究の報告とインドネシアの舞台芸術の状況

## 1. 活動概要

インドネシアにおけるシェイクスピア作品の調査研究を主題とし、インドネシアのアーティスト、プロデューサー、アーツマネージャー、コーディネーターなど様々な立ち位置の方のインタビューを行ない、シェイクスピア作品についてのヒアリングはもちろん、インドネシアにおける舞台芸術の状況を把握し、日本との比較や今後の国際共同制作を視野にアジアにおけるネットワーク構築の可能性についても検討を行なった。



## 2. 横須賀智美氏の活動

協力者である横須賀智美氏はジョグジャカルタ在住のアーティストである。2003年9月より文化庁新進芸術家派遣制度にて1年間のインドネシア滞在を行ない、2011年9月より活動拠点をジョグジャカルタに移す。インドネシアでは主に TEATER GARASI（劇団）の創作に参加し、数多くの作品に出演する。また日本にインドネシアのアーティストを招聘するなど国際交流企画も積極的に行なっている。

## 3. フェロウシップ活動記録

2015年4月13日インドネシアのジョグジャカルタに羽田より飛行機（ジャカルタ経由）で到着。翌日（2015年4月14日）協力者である横須賀氏と会い、今後のスケジュールなどを打ち合わせる。ジョグジャカルタにて Papermoon Puppet Theatre（Iwan Effendi 氏、Maria Tri Sulistyani 氏）、Andy Sri Wahyudi 氏、Ratri Kartika Sari、Joned Suryatmoko とコンタクトを取り、ヒアリングを行なう。

2015年4月25日ジョグジャカルタから飛行機でバタム島へ。空港からタクシーにてフェリー乗り場に行き、高速艇にてピンタン島に到着。今回のプロジェクトを依頼した企業の宿泊施設にて共同生活を行ないつつ、ワークショップ、地域の方による映像撮影を行なう。

2015年5月4日以降はジョグジャカルタ近郊の様々な町を調査研究。車で2時間ほどのソロという町にはレンタカーを借り、訪問。ソロは2015年2月に TPAM に招聘された Eko Supriyanto 氏も住む現代的なダンスも盛んな土地であり、伝統工芸であるバティックの良産地としても有名。芸術大学や公共ホール、舞踊会場などを見学させてもらう。

2015年5月10日に列車にてバンドゥンに移動する。今回の受け入れ施設でもあるバンドゥン国立芸術大学にて、Fathul 氏、Arthur S Nalan 氏、Benny Yohanes 氏、Yani Mae 氏よりインドネシアの劇団変遷やなぜシェイクスピア作品が最近のインドネシアでは上演されないか、という点について研究者の立場からの意見をヒアリングさせてもらった。

2015年5月13日バンドゥンより列車でジャカルタに向かう。ジャカルタでは国際交流基金ジャカルタ日本文化センターを訪問し、インドネシアの舞台芸術についてお話を伺う。またジャカルタ・アーツ・カウンシルにて Helly Minarti 氏よりヒアリング、Jecko Siompo 氏のダンスや JKT48 などを視察する。

2015年5月24日にジャカルタより飛行機でパリ入り。バリアートセンターにてグローブ座「ハムレット」を観劇。この作品はロンドンのグローブ座において創作され、全世界をツアーしている。非常に簡易的なセットであり、音楽も出演者が演奏するなど世界ツアーを意識した作品であった。今後日本でも上演予定。その後はウブドに移り、パリの伝統舞踊、ケチャを観劇。同じインドネシアと言っても宗教をはじめ色々と異なっており、芸術文化においてもジョグジャカルタなどとはまた違った文化が育まれている。



#### 4. フェローシップ活動を終えて

2015年4月13日よりインドネシアに滞在し、約2ヶ月間調査・研究を行なったが、行えば行なうほどインドネシアの物理的な大きさはもちろん、芸術に対する奥深さを痛感し、たった2ヶ月でどこまで深めることができるのか？と絶望に近い気持ちになった。が、落ち込んでみられないのでできる限りの事を行ない、そして今後も継続してインドネシアに関わっていけるための種まきを模索することにした。

まず、今回のテーマである「インドネシアにおけるシェイクスピア作品の調査・研究」だが、舞台芸術の関係者に話を聞く限り、近年学生による発表公演以外でシェイクスピア作品をインドネシアのアーティストが上演した記憶がない！という驚くべき状況に直面した。その後も様々な関係者からヒアリングをしたところ、20数年前に「ジュリアス・シーザー」を上演したのが最後ではないか？とのこと。そこで著者は「インドネシアではなぜシェイクスピア作品を上演しないのか」という点について考察したいと考えた。そして、その原因を追求する過程でインドネシアにおける舞台芸術環境の違いを知ることになる。

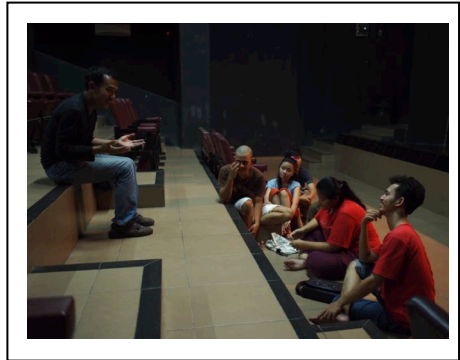
インドネシア（とは言ってもとても広いので、今回はジョグジャカルタ、ジャカルタ界限ということにしておく）の舞台芸術はチケット収入だけで公演を成立させることは非常に難しい。ジャカルタにおいて最も商業的に成功している「コマ劇団」ですら俳優は別に職業を持っている。そのため、普通の団体は公演資金を企業（スポンサー）や国内・海外の財団などからのスポンサーによって賄っていることが多いようである。また慣習的に稽古期間中のキャストのケータリング（軽食、飲み物だけでなく、夕方にはお弁当が配られる）を主催団体がカバーするため、キャスト数が多いと予算がかさむため、少人数キャストの作品の上演が多い、という傾向がある。

まず、この点において、基本的にキャスト数が多いシェイクスピア作品は敬遠されるようである。また日本などではキャスト数が多くても少人数で1人が何役か演じるような演出も行われているが、インドネシアではそのような演出があまり行われな（脚本に忠実に演出することが多い）とのことであった。

またインドネシアでは過去に政治的な主張が盛り込まれた作品は政府による検閲を受け、上演できなくなることがあり、脚本をベースにした創作ではなく、口立て（演出家が稽古中にセリフを役者に伝え創作していく手法）での創作が行われたことにより、脚本を読み込む能力が養われなかった。そのため、海外の脚本を読み込み、創作するということがあまり重視されず、シェイクスピア作品の上演も必然的に少なかった。また翻訳の問題もあり、英語からインドネシア語への翻訳の精度が低かったこともシェイクスピア作品の魅力が伝わらなかった要因だと言われている。さらにインドネシアの表現には通常舞台芸術で使われる言葉で伝える表現と身体によって伝える表現＝身体言葉という表現があるようで、この特殊性からも脚本重視ではなく、表現（演出、役者）重視の創作が主流となっているようである（身体言葉という表現についてはまだ詳しくリサーチできていないので、今後さらに掘り下げていきたいテーマである）。

またバンドゥン国立大学の教授によると、シェイクスピアの普遍的なテーマはインドネシアに古くから伝わる民話のテーマと共通性があり、わざわざシェイクスピアを上演するよりも、インドネシアの民話をアレンジするほうがアーティストとしても、観客としても好まれる傾向がある、とのことである。

以上のような理由からインドネシアでは現状シェイクスピア作品の上演が少ないようである。が、こういう理由だからこそ、シェイクスピア作品の上演による技術力向上が期待でき、インドネシアのアーティストによる自発的な企画ではなく、外部からの企画としてシェイクスピア作品の上演を検討することは意義があると改めて考えた。幸運にも2016年は東京芸術劇場の国際共同制作企画として日本・シンガポール・インドネシアの3カ国に



た。幸運にも2016年は東京芸術劇場の国際共同制作企画として日本・シンガポール・インドネシアの3カ国に

よるシェイクスピア作品の制作を担当する。この事業を出発点とし、今後もインドネシアでのシェイクスピア作品上演プロジェクトを企画したり、そのようなプロジェクトに積極的に関わっていきたいと考えている。

最初にも述べたように今回のインドネシアでの調査研究は自分にとってスタート地点であり、今後の活動がより重要になると考えている。アジアにおける舞台芸術の議論、ネットワーク構築にはお互いの地域の良さを理解し、それを主張するのではなく、あえて客観的に捉え、違いを理解することが重要だと考えている。その客観的に捉える1つの道具として西洋で長い年月をかけて熟成されたシェイクスピア作品が有効に使えるのではないか？という仮説を今後も検証していきたいと考えている。長期的な活動になると思うが、自分自身のライフワークの1つとして継続していきたいと思う。最後に、このような機会を与えていただいた国際交流基金アジア・センターには心より感謝いたしております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

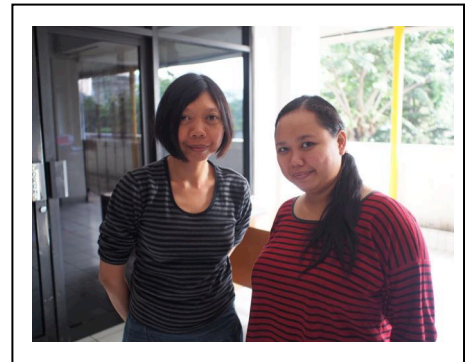


写真1：国際交流センター ジャカルタ 日本センター

写真2：バリ島 デンパサールにて観劇したロンドングローブ座による「Hamlet」

写真3：演出家・俳優の Andy Sri Wahyudi 氏（左）

写真4：ジョグジャカルタ国立芸術大学での演劇授業の様子

写真5：ジョグジャカルタに拠点を持つシアターガラシの稽古風景

写真6：バンドゥン国立芸術大学にてインドネシアの劇団の流れをレクチャーしてもらう

写真7：ジャカルタアーツカウンシルの Helly Minarti 氏（左）

写真8：バリ島 ウブドで観劇したバリ舞踊